

参考資料：岡山縣上道郡古都村史、現代古都の郷、ふるさと古都  
岡山史蹟めぐり（岡山市立西大寺公民館古都分館）、岡山市の地名

## しょうないがわ 庄内川

居都庄の内の川と言う意味で庄内川といわれるようになったと考えられる。庄内川は旭東の北部平野を灌漑（かんがい：日照り続きのため、農作物などが受ける被害）する旭川の水を引いた祇園用水の一部である。祇園用水の造られた時代は明確ではないが、恐らく室町時代末に旭川東岸の農民が協力して旭川の水を利用する簡単な用水を作ったが、江戸時代初期池田家と農民の協力によって大体今日のような旭東北部の平野を潤すような大用水になったと考えられる。庄内川は宍甘の西辺より祇園用水を受け、宍甘の部落を貫流し、宿の高通りより東南に流れ土曲がり（ひじまがり）にて南に折れ、宿、藤井、鉄、南方、浮田村の北方を灌漑し、下、長利を経て中川で倉安川の川底を底桶で貫通し、さらに南通し、さらに南流して門桶（もんび）で百間川に合流している。庄内川は用水の役をはたすとともに前期の各部落及び浮田村中尾等より流下する悪水を受けて排水路の役をなしている。しかし児島湾の海面との差がわずかであるために昔からの豪雨の際は排水に苦心が続けられている。

庄内川の排水をさらに困難にし、南方部落の水田を豪雨時に水没化せしめた原因として百間川の築造、倉安川の創設児島湾岸の干拓による新田開発があげられる。百間川を庄内川の下流地域につくることにより、宍甘、宿、南方、藤井、鉄、北方の庄内六ヶ村の排水が悪くなることは明白であったが、百間川創設の議がおこった際備前藩当局は庄内六ヶ村の収穫を多少犠牲にしても、岡山城下を水害から守るためには止むを得ないと考え、築造したのであった。百間川創設に際して庄内川地域の悪水排除については多少の考慮ははらったとみえ貞享4年（1687）には南方より中川までの悪水抜の川を堀替えたらしい。

しかし庄内川地域の村々の悪水の排出問題は解決しなかつたらしく、津田永忠は庄内村々の排水も岡山城下町を洪水より救うためには多少の犠牲もやむなしとしている。

農民は用水組合を作り、長年保持運営に努めてきた。宿の尾坂金次郎氏も戦中戦後の長期にわたって治水に尽力した。その功績を讃えて、庄内川畔に顕彰碑が建てられた。

昭和51年、長雨による洪水に際し激甚災害法による救急工事が施工され、以後水害を免れるようになった。現在も庄内川の管理は続けられている。